

# vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.239

# 10-11

October-November 2020

## MCOの“弦”点回帰

特集

02

- 02 水戸室内管弦楽団 第106回定期演奏会
- 04 ちょっとお昼にクラシック 藤木大地(カウンターテナー)
- 06 INFORMATION

水戸芸術館  
ART TOWER MITO

Photo: Michiharu Okubo

## MCOの“弦”点回帰

マーラーとストラヴィンスキーにみる弦楽の美 文・篠田大基



ベートーヴェン(マーラー編曲):弦楽四重奏曲第11番<セリオソ>  
水戸室内管弦楽団第31回定期演奏会(1997年)にて

コロナ禍でコンサートが次々と消えていった今年の春。5月に予定していたマルタ・アルゲリッチ氏を迎えての水戸室内管弦楽団(MCO)の定期演奏会も、残念ながら中止となってしまいました。今、各地でコンサートが再開されるようになり、まだコロナ以前と同じとはいきませんが、それでも嵐の後に雲間から差し込む光のような、明るく喜ばしいものを感じます。そしてMCOもついに、10月31日と11月1日、再び定期演奏会を開催できる運びとなりました。

とはいえ、MCOの管楽器奏者を中心に、海外在住メンバーの多くはまだまだ渡航が困難な状況であり、感染症終息の兆しも見えません。そこで今回は国内在住の演奏家を中心に、管楽器なし、指揮者なしで演奏を行います。ブルッフの〈コル・ニドライ〉(弦楽合奏版)の静かな祈りに始まり、ベートーヴェン作曲、マーラー編曲の弦楽四重奏曲第11番〈セリオソ〉、ストラヴィンスキーの〈ミューズを率いるアポロ〉という、聴き応えのある弦楽合奏曲が並びます。室内乐的な綿密なアンサンブルと多人数での演奏ゆえの表現の幅の広さ、その両方を同時に味わっ

ていただければ幸いです。

前回2月の定期演奏会では、今年30周年を迎えたMCOのこれまでの演奏曲から思い出に残る作品を集めてお贈りしました。そのなかには、初めての演奏会で奏でられたチャイコフスキーの〈弦楽セレナード〉、吉田秀和前館長とMCOに捧げられたバルチャイ編曲のショスタコーヴィチ〈アイネ・クライネ・シンフォニー〉という、2曲の弦楽合奏曲がプログラムに組み込まれていました。MCOは特に草創期に、弦楽合奏曲をさかんに取り上げてきました。小澤征爾総監督は、「弦楽四重奏(カルテット)がクラシック音楽の基本であり、カルテットを拡大したものがオーケストラ」という持論をたびたび語っています。今回、1997年以来23年ぶりに取り上げることになるマーラー版〈セリオソ〉は、まさに小澤総監督の持論を具現化した音楽と言えるでしょう。コロナ禍に期せずして生まれた全編弦楽合奏プログラムの今回は、結成から30年を経たMCOの“弦”点回帰の音楽会なのです。

弦楽合奏の魅力はどんなところにあるのでしょうか。ここでは、今回演奏

される〈セリオソ〉と〈ミューズを率いるアポロ〉を軸に考えてみたいと思います。

\*

弦楽合奏はオーケストラの、いわば核です。歴史的に見ても、オーケストラは、弦楽合奏に管楽器を少しずつ加えていくようにして発展してきました。その弦楽合奏の精髓を抜き出した音楽が、弦楽四重奏と言えるでしょう。弦楽四重奏曲が誕生した古典派の時代には、弦楽合奏の音楽もさかんに作られました。MCOの十八番とも言えるモーツァルトの〈ディヴェルティメント〉K.136のように、弦楽合奏でも弦楽四重奏でも演奏される曲もあります。

ところが19世紀になると弦楽合奏の音楽は、もちろん名曲も存在するものの、全体としては数が減ってゆきます。それは、オーケストラの大規模化と不可分の関係にあったはずですが。今回の演奏会で最初に演奏されるブルッフの〈コル・ニドライ〉(1880年)も、原曲は二管編成(各管楽器2人ずつ)に、ホルンは4人、トロンボーンは3人、さらにティンパニとハーブが加わる大編成で書かれていました。

楽器編成の巨大化の極北に立つのがマーラー（1860～1911）でしょう。数々の超弩級の交響曲を作り上げた彼が、〈セリオソ〉のような弦楽四重奏にも目を向けたのは、一見、意外に思えるかもしれません。しかしこれも、言うなれば「弦楽四重奏の巨大化」。マーラーは、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲の真価が理解されるには、「四人の奏者だけでは絶対的に不足」だと信じていたのです（マーラーの友人ナターリエ・パウアー＝レヒナーの回想『グスタフ・マーラーの思い出』高野茂訳（音楽之友社、1988年）。〈セリオソ〉は、ベートーヴェンの16曲ある弦楽四重奏曲のなかで最も演奏時間が短く、その切り詰められた構成と急速な展開が、作品の愛称（厳粛、真剣の意）のとおり緊迫感を生み出しています。マーラーは、ベートーヴェンによって四重奏のなかに凝縮された音楽の世界を、逆に多人数の弦楽合奏に解き放つことで、ベートーヴェンが作品に込めた構想の大きさを提示しようとしたのではないのでしょうか。

マーラーは、〈セリオソ〉の編曲（1899年）にあたり、原曲をほとんど変えていません。それでも第1楽章や第3楽章では、多人数ならではのエネルギーが炸裂し、第4楽章の最後ではクレッシェンドをともなって駆け上がるような爽快なクライマックスが築かれます。その一方で静かな第2楽章では、マーラーは、チェロの動きにコントラバスのピツィカートを重ねたり、楽章の終わりではベートーヴェンの時代には使われない「pppp」の指示を加えたりして、弦の音色の繊細さが現れるように心を砕いています。このような強弱のダイナミズムこそ、多人数の弦楽合奏によって開示される〈セリオソ〉の魅力と言えるでしょう。

さて、マーラーの時代を経て、オー



グスタフ・マーラー

ケストラの巨大化に対する反動が起こったのが、20世紀の两大戦間の時代でした。新しい響きを探究する作曲家たちの様々な試み、そこに戦争や経済的な問題で沢山の音楽家や楽器を集めることが難しくなったという事情が関係し、それまでにないユニークな楽器編成の音楽が生まれてきます。

五管編成（各管楽器5人ずつ）の大オーケストラで演奏される〈春の祭典〉（1913年）を書いたストラヴィンスキー（1882～1971）が、戦争を題材にした〈兵士の物語〉の音楽（1918年）に小さな楽器編成を選んだ背景にも、戦争の影響があったとされます。その後もストラヴィンスキーは管楽器を中心に、オーケストラよりも小編成のアンサンブル作品に力を注ぐようになりました。

1927年、ストラヴィンスキーは、ギリシャ神話にもとづくバレエ〈ミューズを率いるアポロ〉の作曲を依頼されます。動きの無駄を取り去った「古典舞踊の線的な美しさ」に相応しい音楽を書こうとしたストラヴィンスキーが、ここで注目したのは、それまでどちらかと言えば避けていた、弦楽器でした。彼はこう述べています。

「弦楽器の多様な響きの好音調に浸り、それをポリフォニックな組立てのごく些細な片隅まで浸透させるというのはなんとという喜びだろう！そして弦楽器を支える歌に流れ込む旋律の波以上に古典バレエの簡素な構図をどうやってうまく表現でき

るだろう！』（『私の人生の年代記——ストラヴィンスキー自伝』笠羽映子訳（未来社、2013年）p.158）

ストラヴィンスキーが弦楽器に求めたもの、それは流麗な旋律線でした。〈ミューズを率いるアポロ〉は弦6部（ヴァイオリンとチェロが2パートずつ）を基本に、部分的にはコントラバス以外がさらにソロ（独奏）とトゥッティ（総奏）に分かれて、最大11パートのアンサンブルになります。何本もの線が折り重なり、絡み合う音楽。しかしあくまで透明な響きをたたえています。その音の綾につつまれる快感は、なるほど弦楽のアンサンブルだからこそもたらされるのかもしれない。



イーゴリ・ストラヴィンスキー

マーラーとストラヴィンスキー。異なる時代を背景に、それぞれが見出した弦楽の美——強弱のダイナミズムを、流麗な旋律線の織りなす綾を、室内楽の名手が揃うMCOの精妙なアンサンブルで、どうぞご堪能ください。

#### ■公演情報

### 水戸室内管弦楽団 第106回定期演奏会

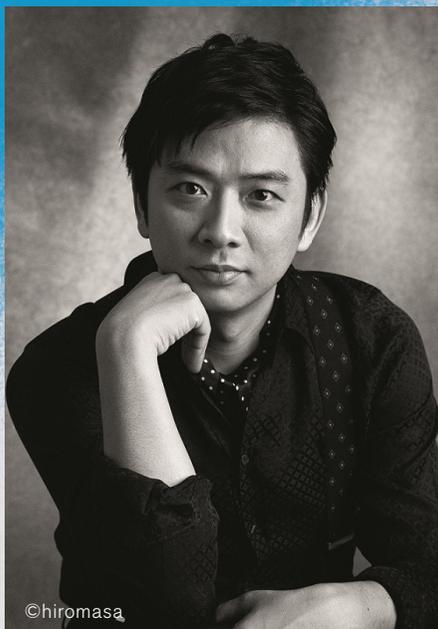
2020.10.31（土）、11.1（日）両日15:00  
【全席指定】S席¥5,000/A席¥4,000/  
B席¥3,000/U-25（25歳以下）¥1,500

#### ●プログラム

ブルッフ（フィドラー編曲）：コル・ニドライ  
作品47（弦楽合奏版）チェロ独奏：宮田大  
ベートーヴェン（マーラー編曲）：  
弦楽四重奏曲 第11番 へ短調（セリオソ）  
作品95（弦楽合奏版）  
ストラヴィンスキー：ミューズを率いるアポロ

# ちょっとお昼にクラシック 藤木大地 国際派のカウンターテナーがいざなう、 時空を超える音楽の旅

聞き手:高巢真樹



日本が誇る国際派のカウンターテナー、藤木大地さんが水戸芸術館に初登場します。公演に向けて、カウンターテナーとして活躍するまでの様々な出会いと挑戦、言葉へのこだわり、今あらためて抱く音楽への熱い思いについて気さくに語っていただきました。

—宮崎県ご出身ですね。子供の頃の思い出について教えていただけますか？

幼稚園の年長のときに半年間、親の仕事の関係で兵庫県伊丹市に住みました。それで10月に宮崎に戻ったのですが、その幼稚園ではクリスマスにキリストの誕生を祝う劇をやるんです。でもその時点で残っていたのが、台詞一つだけの羊飼いの役。でもそれではかわいそうだったのか先生が歌う機会をくださって、友達と二人で独唱しました。それが舞台上で初めて歌った記憶です。ちなみに転校した1985年って阪神タイガースが優勝した年。大の阪神ファンになりました(笑)。

—宮崎大学教育学部附属中では合唱部に入られたそうですね。

最初は野球部に入ったのですが、音楽の授業で真面目に歌っていたら、先生から「声がいいね」と言われて合唱部にも入ることになりました。野球部では補欠だけでしたが合唱部では重宝されましたね。

—その後、高校生の頃に「大学で声楽を学ぼう」と決心されたそうですが、本格的に歌手を志すようになったのはいつ頃でしょうか。

東京芸術大学を卒業して、大学院には落ちて。でも新国立劇場オペラ研修所に受かったんです。そこで奨学金をいただきながら勉強する生活を送っていた頃かな。音楽だけで生きていきたいと思いました。

—テノール歌手だった頃にお好きだった作品は？

テノールがみな目指すように〈ラ・ボエーム〉が好きでした。ロドルフォなんて超かっこいいやと思って。青春の役ですね、何回見ても泣いちゃいます。プッチーニ、好きだったな。最初にスカラ座で観たのも〈トスカ〉。スカルピアがレオ・ヌッチで、カヴァラドッシがサルヴァトーレ・リチートラ、トスカがマリア・グレギーナ。当時からイタリア語のものが好きだったので、留学を目指して早くからイタリア語を勉強しました。あとはパヴァロッティが好きでした。

—ウィーン留学中にカウンターテナーへの転向を決断されたそうですね。

最初は、テノールとしてイタリアに留学しました。それでヨーロッパの劇場で歌いたいと思い、ドイツのあらゆる劇場に手紙と履歴書を送ってオーディションを申し込んだ。70通くらいかな。でも返事が来たのはたったの2、3通。でもあきらめきれず、30歳のときに、今度は声楽も文化経営学も学べるウィーンの大学へ。「夢を追うのは30歳までにしよう」という背水の陣のような気持ちでした。それであるとき試験の準備をしていたら、風邪で声が出なくなってしまって。でも暗譜だけはしようと裏声で音符を辿っていたら、「あれ、この声すごくいいんじゃない?」と思ったんです。地声でいい声を出そうとするより、裏声であればリラックスした気持ちで自由に歌えた。自分という楽器は、カウンターテナーではないかと気付いた瞬間でした。

—カウンターテナーとして活動を始めてから6年後の2017年には、ウィーン国立歌劇場にデビューされました。カウンターテナーは、オペラでは幅広い役がありますが、どんなことを大事にしながら準備されていますか？

確かにオペラの中のカウンターテナーには様々な役がありますが、他の登場人物との関係が作品を作るので、その役が少年か英雄か神の使者か…ということはそれほど重要ではないと思っています。例えば現在新国立劇場で稽古している〈夏の夜の夢〉では、まずシェイクスピアの原作を読んでオペラの台本と比較します。原作には、オペラでも使われている台詞とそうではない台詞があり、後者の方が実は大事だったりするんですよね。

その舞台のオリジナルの演出家、デイヴィッド・マクヴィカーさんとは2年半前にウィーンで仕事したことがあります。そのときに〈夏の夜の夢〉のアリアを聴いていただいたら、「テキストをもう少し見通した方がいい」と言われて。ですので今回はイギリスで買った英語の原作と、福田恒存訳と比べる勉強をしています。そうすると、自分が歌う歌の意味も変わってくると思っています。

—歌手としてのご活躍のほか、インタビューや教育のお仕事にも携わっていらっしゃいますが、これから実現したいことはありますか？

マルチに活動することについては、僕、20代後半の時もそうだったんです。そんな中、あるとき南仏のニースでミシュランの星を獲得している日本人のシェフと知り合って、その後南仏旅行をした時にそのお店で食事したんです。その時に、その年上のすごい方に自分ができることをたくさん羅列したら、「でも、それは一つの道を究めてからだよ」と言われて。

幸いそれから、自分が勝負できる声を見つけて、30歳からもう一度やり直すわけです。さらに10年がたち、今は自分のやりたいことが歌で実現できている。もちろん、渡航が自由になったら、また海外でやりたいという希望はあります。そして常に、昨日より明日の方が上達したい。スポーツ選手と一緒に。自分の目指すパフォーマンスが実現できる限りは、丁寧に歌い続けたいです。

—今回の曲目はどのように決めてくださいましたか？

企画のタイトルを聞いて、これはパーセルの〈ひとときの音楽〉で始めるしかないと思いました。そこから始

めれば幅広い時代をカバーできます。自分のレパートリーからの曲と、新しい曲を組み合わせて構成しました。ピアノは佐藤卓史さんをお願いしたので、ドイツリート、特にシューベルトを入れたい。一曲選ぶなら〈魔王〉だなと。あと、〈くちなし〉とか〈レ・ミゼラブル〉、加藤昌則さんに委嘱した〈てがみ〉など久しぶりの曲も歌います。

—佐藤卓史さんについてはどんな印象をお持ちですか？

彼は僕が大学3年か4年のときに東京芸大附属高の3年生でした。日本音楽コンクールで優勝して、奏楽堂でコンチェルトを弾いているのを聴いて、とてもうまい人がいるなと思ったのを覚えています。それで今年1月に、シューベルトの〈美しき水車小屋の娘〉を歌うコンサートがあり、初共演をお願いした。そのときの演奏がとにかく素晴らしかったんです。すごく信頼しているし面白いです。期待した以上のことを自発的に考えてやってくれる人です。

—いま改めて、私たちにとって音楽はどんな存在だと思われますか？

この夏、びわ湖ホールでリサイタルをしたら、地元の人が、自分の町の劇場に音楽が戻ってきたことをすごく喜んでくださったんです。僕らも日常を一度失ったうえで舞台に戻れることがとにかく嬉しくて。だからこれから劇場は、音楽へのより深い愛情が満ちた空間になるはず。そしてそれは、幸せな日常にもつながる。音楽は衣食住には直結しないけど、並列で話せるようにはなると思います。心とからだの健康はつながっているから。ドイツではどの中規模な町にも劇場があ



2017年にウィーン国立歌劇場で世界初演されたライマン作曲のオペラ〈メディア〉  
©Wiener Staatsoper / Michael Pöhn

り、イタリアではオペラが21時に始まるから、みんなご飯のあとに行くのを楽しみにしている。劇場が日常に溶け込んでいるんですね。きっと水戸の皆さんにとって水戸芸術館もそういう存在でしょうし、僕も何うのが楽しみです。これから永いお付き合いができたらと思います。

—11月の公演もぜひ皆様を楽しみにしてお越しいただきたいですね。来水をお待ちしております！

(インタビュー全文は当館ウェブサイトに掲載いたします)

2020年9月15日

協力:株式会社AMATI

#### ■公演情報

### ちよっとお昼にクラシック 藤木大地(カウンターテナー)

2020.11.7(土) 13:30

【全席指定】¥1,500

(カップオン水戸芸術館ブレンド/1枚付き)

#### ●出演

藤木大地、佐藤卓史(ピアノ)

#### ●プログラム

シューベルト:魔王  
加藤昌則:てがみ ※委嘱再演  
ヘンデル:歌劇〈リナルド〉より  
“風よ、旋風よ” ほか

# INFORMATION

※以下は10月5日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

## チケット・インフォメーション

《10.31(土)発売分》

■庄司紗矢香(ヴァイオリン) & ヴィキングル・オラフソン(ピアノ)  
12.18(金) 19:00

《11.28(土)発売分》

■クリスマス・プレゼント・コンサート 2020  
12.20(日) 17:00

■講座「吉田秀和初代館長の好きな曲」第2弾  
2021.1.10(日)、17(日)、24(日) 各日14:00(予定)

## 10・11月の主な音楽イベント

### コンサートホールATM

#### ◆ホール de ブロムナード・コンサート(入場無料)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、客席の間隔を空け、全席指定(計140席)・事前予約制で開催いたします。必ず事前にお電話(チケット予約センターTel.029-231-8000)か、エントランスホール・チケットカウンターにて、ご予約をお願いいたします。

10.24(土) 13:30~14:00

松野美樹(バロックトランペット)、徳田佑子(ポジティブオルガン)

#### ◆水戸室内管弦楽団 第106回定期演奏会 予定枚数終了

(チェロ独奏:宮田 大)

10.31(土)、11.1(日) 各日15:00

料金[全席指定]S席¥5,000/A席¥4,000/B席¥3,000/  
U-25(25歳以下)¥1,500

#### ◆ちょっとお昼にクラシック 藤木大地(カウンターテナー)

11.7(土) 13:30

料金[全席指定]¥1,500

(カップオン水戸芸術館ブレンド/1枚付き)

#### ◆シリーズ:ベートーヴェン~時空を超えて~Vol.4 公演中止

原田禎夫(チェロ) & 加藤洋之(ピアノ) デュオ・リサイタル  
11.15(日) 15:00

料金[全席指定]一般¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,000

※本公演は出演者の来日が困難となったため、中止とさせていただきます。チケットの払い戻しなどにつきましては、当館ウェブサイトの公演情報をご確認ください。

### エントランスホール

#### ◆オルガン・レクチャーコンサート Vol.1 オルガン潜入捜査

(講師・演奏:室住素子、解説:松崎譲二) 予定枚数終了

10.16(金)、17(土) 各日19:00

料金[全席指定]一般¥3,000/U-25(25歳以下) ¥1,000

2020年10月13日発行(第239号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、石井亮子、小野瀬咲子、高木春佳

発行:(公財)水戸芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

### 編集後記

〈ミュージズを率いるアポロ〉とは?と、思っていた矢先、偶然書店に並んでいた『ギリシャ神話キャラクター辞典』なるものを購入しました。実は日常にも溶け込んでいるギリシャの神様方。何より、家族構成の複雑さに驚か。(り)

私のデスクは思い出の宝庫です。全く片づけが進みません。とても濃い3年5か月でした。私の水戸芸術館人生に携わってくれたすべての皆様に心から感謝を込めて、ありがとうございます!(タカラジェンヌの退団挨拶風)(咲)

秋の宵、家の窓を開けていると、大音量で虫の声が聞こえてきます。ストラヴィンスキーが愛飲していたというバラタン30年はとても手が出ませんが、どんなお酒でもちょっと美味しくなる最高のBGMです。(鴻)

## 演劇・美術のイチオシ企画!

### ACM劇場

#### ◆伝統芸能のススメ[落語]

柳家喬太郎独演会

10.21(水) 18:30 予定枚数終了

料金[全席指定]

S席¥3,500/A席¥3,000/

B席¥2,500



### 現代美術ギャラリー

#### ◆道草展

8.29(土)~11.8(日)

[休館日]月曜日

[開館時間]10:00~18:00

※入場は17:30まで

[入場料]一般¥900

※高校生以下・70歳以上・障害者手帳

をお持ちの方と付添いの方1名は無料



上村洋一(息吹のなかで)2020年  
G1チャンネルサウンド、蛍光塗料、紫外線ライト、植物育成LEDライト、砂  
撮影:根本謙

ストラヴィンスキーは、「自分の名前がストラヴィンスキーだと思っぐらい、スコッチが好きだ」と言っていたらしいよ。



〈コル・コドライ〉の作曲者ブルッフは今年が没後100年。ベルリン王立芸術院の作曲部長として、山田耕筰の留学を受け入れたのが彼でした。彼の存在なくしては、後の大作曲家・山田耕筰は生まれなかったかもしれません。(篠)

なんだかんだで時は進んでゆく。知らぬ間に蝉の鳴き声が蟋蟀たちの大合唱にとって代わり、金木犀の芳香も束の間、もう肌寒さを感じるようになった。そんな中、鵬程万里の門出あり。咲さんの新しい人生に幸あれ。(て)

はじめまして。8月から音楽部門スタッフの一員となりました。コロナ禍でも音楽に触れながらお仕事出来る幸せを噛み締めながら、精いっぱい頑張ります!宜しくお願いたします。(春)

まさに音は人なり。と感じられた映画「ジャズ喫茶ベイシー Swiftyの詩」。世界中から客が集う岩手の伝説的ジャズ喫茶のマスターが、半世紀こだわりぬいた極上の音とその生きざまの魅力。マエストロ小澤やヴァイオリンの豊嶋泰嗣さんもお出演!(樹)

偶然の出会いと必然の別れ。大きな影響を受けた今は亡き恩師が教えてくれた言葉だが、過ぎた時間を振り返るたびに、想い起こしている。笑顔を絶やさなかった咲さん、長い間お疲れ様でした。元氣一杯の春さん、これからよろしくお願いたします。(中)